蔦谷栄一の異見私見

まずは嫁を味方に

春を迎えて畑仕事も本格化してきた。山梨にある筆者の畑の隣は、一人暮らしのおばあちゃんが齢を重ねて介護施設で暮らすことになってしまったことから、東京に住む息子さんが畑の面倒を引き継いでいる。とはいえ息子さんはたまにきて耕耘機を動かす程度。雑草を生やさないようにするだけで精一杯。畑からは活気が失せ、寂しくなってしまった。

そのおばあちゃんとは、畑仕事の合間に世間話をすることがあった。今も耳に残る一つが、せっかく作った野菜を東京に送っても、嫁がちっとも喜んでくれないとの嘆きである。

場面は変わるが、先般、宮城県の某農協の組合長と常務が、いろいろと議論したいということで、わざわざ山梨まで足を運んでこられた。話題は農協改革からTPP後の農産物貿易自由化の行方、米生産調整の廃止、集落営農の実情等多岐に及んだ。

こうした中で話の軸となったのが、日本農業が生き残っていくための基本戦略は大規模化ではなく、生産者と消費者との関係づくりを強化していくところにしかない、ということであった。

そしてこれに関連して組合長の口から飛び出したのが、今、農家の主婦の最大の悩みの一つは自分たちの作った野菜を嫁が食べてくれなくなってしまったことにあるという。その嫁はけっして野菜嫌いというわけではなく、買ってきて調理している。つまり嫁にとっては、野菜はスーパーの棚に並んだものであり、買ってきて食べるものであって、自分たちで作るもの、あるいは身近な親等から送ってもらうものではない、ということらしい。

コンビニ世代として育ってきた嫁とのギャップは大きく、作る側にとっては身近な存在が食べて喜んでくれることが働きがい、生きがいとなるはずが、そうした“当たり前”の夢がかなわなくなり、張合いを失ってしまった人も少なくないという。

組合長等との話はこれをもとに、農業者の農政による支援の増強や消費者との連携強化が必要であることは間違いないものの、農業者自らが取り組んでいくべきこと、やれることはまだまだあるのではないか、という結論めいたものに達した。

例えば自らが作った農産物のおいしさ、安全安心等の価値に誇りを持つと同時に、遠い消費者以上にまずは身近な消費者にこれらを訴え、また生産した農産物を調理しての食文化を伝えていくことが必要ではないか。さらには農業者が「農業は大変だ」「農業は儲からない」というばかりでは後継者の確保・育成ができるはずもない。まずは自らの子弟に農業のおもしろさ、楽しさを伝えていくことが必要であり、これこそが最大の後継者対策となるのではないか、等々。

目下、農業問題のすべてが所得増加の文脈からしか語られなくなりつつあるが、日本農業は多様な特性を持っており、特に身近に存在する安全・安心・健康に敏感な大量の消費者との連携を強化していかない手はない。上の例のように自らの足元での見直しの余地は多い。現場力や地域資源の掘り起こしだけでなく、農業のおもしろさ再発見にもつながってくる。

情勢が厳しさを増していくことは必至であろうが、先行きを悲観ばかりする必要もない。

（農的社会デザイン研究所代表）